

平成20年度項目別評価表
業務実績 添付資料

(独) 沖縄科学技術研究基盤整備機構

平成20年度評価表 添付資料一覧

添付#	名称	頁
#1-1	研究ユニット一覧(H20)	1
#1-2	研究ユニット所属人数	2
#1-3	平成20年度 共同研究契約・受委託研究契約	3
#2	主任研究者 採用手順のガイドライン	4
#3-1	月別コンピューター使用時間	5
#3-2	月別コンピューター使用回数	5
#4-1	G8「環境とエネルギー問題」ワークショップ(チラシ)	6
#4-2	G8「環境とエネルギー問題」ワークショップ(要旨)	7
#5-1	冬期コース「生物複雑系の進化」プログラム	9
#5-2	「生物複雑系の進化」コース2008参加者数	10
#6	2008年出版リスト	11
#7-1	年次報告書・ニュースレター配布先	15
#7-2	普及活動	16
#8	特許出願リスト	18
#11-1a	ワークショップ開催実績(H20年度)	19
#11-1b	セミナー開催実績(H20年度)	20
#11-1c	国際ワークショップ 対前年度	24
#11-2	ワークショップアンケート	25
#12-1	新大学院大学の青写真	39
#12-2	平成20年度大学院大学設置準備グループの活動概要	42
#12-3	大学・大学院等に関する調査	43
#12-4	大学院大学開学に関する追加資料	44
#13	学長人選について	46
#15-1	キャンパス整備状況	47
#15-2	ラボゾーン施設整備状況	47
#16	ファカルティ宿舎利用状況	48
#18	移転業務 行程計画表(素案)(2010年)	50
#19-1	平成20年度 職員研修リスト	52

添付#	名称	頁
#19-2	新入職員オリエンテーションプログラム	53
#20-1	組織図(080401/090401/090801)	54
#20-2	監事監査実施状況	57
#20-3	国民からの意見募集について	58
#20-4a	理事長室&エグゼクティブオフィス所掌業務	58
#20-4b	組織規程(抄)(理事長室及びエグゼクティブオフィス)	59
#20-5	調達課を人事・財務部の下に置く理由	61
#20-6	競争的資金の獲得業務体制	62
#21-1	平成20年度における随意契約見直し計画のフォローアップ	63
#21-2	平成20年度における調達について(一覧表)	64
#21-3	随契見直し計画の達成状況について	76
#21-4	総務省政策評価・独立行政法人評価委員会の指摘内容を踏まえた対応について(契約の適正化に係るもの)	77
#21-5	新旧対照表(契約事務取扱規則)	78
#21-6	第1回 調達に関する第三者委員会 議事要旨	79
#21-7	第2回 調達に関する第三者委員会 審議概要	81
#21-8	契約の合規性等に係るチェックプロセスについて	87
#22-1	シーサイドハウス施設について	88
#22-2	主要な固定資産の状況	88
#24	企業からの寄附金について	91
#25-1	給与水準の比較指標について参考となる事項	92
#25-2	福利厚生費について(H20年度)	93
#25-3	諸手当について(H20年度)	94
#26	OIST研究ユニット評価手順	95
#28	施設整備費補助金等の繰越額が多いものの業務進捗に支障はない理由について	96
#33-1	H20度 事務職員の採用活動	97
#33-2	H20度 定年制職員数月別データ&採用活動	98

<添付資料 #1-1 >

研究ユニット一覧 FY2008

(平成21年3月31日)

	主任研究者	国籍	ユニット名
1	銅谷 賢治	日本	神経計算ユニット
2	柳田 充弘	日本	G0細胞ユニット
3	遠藤 昌吾	日本	記憶と学習の分子神経生物学ユニット
4	外村 彰	日本	電子線ホログラフィーユニット
5	シドニー・ブレナー	イギリス	分子遺伝学ユニット
6	丸山 一郎	日本	情報処理生物学ユニット
7	内藤 隆之	日本	分子神経科学ユニット
8	ロバート・シンクレア	オーストラリア	数理生物学ユニット
9	政井 一郎	日本	神経発生ユニット
10	クラウス・シュティーフエル	オーストリア	理論・実験神経生物学ユニット
11	ジェフ・ウィッケンス	ニュージーランド	神経生物学研究ユニット
12	ゲイル・トリップ	ニュージーランド	発達神経生物学ユニット
13	ゴードン・アーバスノット	イギリス	行動の脳機構ユニット
14	エリック・デ・シュッター	ベルギー	計算脳科学ユニット
15	ファデル・サマテ	フランス	細胞膜通過輸送研究ユニット
16	高橋 智幸	日本	細胞分子シナプス機能ユニット
17	メリー・アン・プライス	アメリカ	発生分化シグナル研究ユニット
18	佐藤 矩行	日本	マリングenomックスユニット
19	ジョナサン・ミラー	アメリカ	物理生物学ユニット

<添付資料#1-2> 研究ユニット所属人数

ユニット名	発足年月	区分	2005.9.1	2006.3.31	2007.3.31	2008.3.31	2009.3.31
1 鋼谷ユニット	2004.4	1	8	8	8	6	7
		2	1	1	1	1	0
		3	13	15	16	16	15
2 柳田ユニット	2004.4	1	7	7	6	6	6
		2	5	5	5	6	8
		3	14	14	14	15	17
3 遠藤ユニット	2004.10	1	2	3	3	5	3
		2	4	4	4	4	3
		3	8	8	9	11	9
4 外村ユニット	2005.4	1	2	2	3	4	5
		2					
		3	2	2	3	7	9
5 ブレナユニット	2005.12	1		1	1	1	1
		2			2	4	2
		3		1	3	5	3
6 丸山ユニット	2005.11	1		3	8	8	7
		2		2	3	3	4
		3		5	14	13	13
7 内藤ユニット	2005.11	1		2	5	5	4
		2		1	3	3	3
		3		3	8	9	8
8 シンクアユニット	2006.7	1			1	2	3
		2					
		3			1	3	4
9 政井ユニット	2006.1	1			4	5	5
		2			2	2	3
		3			6	8	9
10 シュティールユニット	2006.11	1			1	2	3
		2			2	1	1
		3			3	4	4
11 ウィンケンユニット	2007.1	1			3	5	7
		2				1	2
		3			5	9	11

ユニット名	発足年月	区分	2005.9.1	2006.3.31	2007.3.31	2008.3.31	2009.3.31
12 トリッパユニット	2007.1	1			1	1	3
		2				3	2
		3			1	1	7
13 アーバノットユニット	2007.1	1			2	2	2
		2					
		3			2	2	4
14 デュックユニット	2007.4	1				2	6
		2				4	4
		3				7	11
15 サマユニット	2007.4	1				4	5
		2				2	2
		3				6	8
16 高橋ユニット	2007.4	1				4	7
		2				1	1
		3				6	9
17 プライユニット	2007.5	1				4	6
		2				1	1
		3				6	8
18 佐藤ユニット	2008.4	1					4
		2					3
		3					8
19 ミラーユニット	2008.4	1					3
		2					
		3					4
Grand total		1	19	26	46	13	68
		2	10	13	22	4	36
		3	37	48	85	17	134

1: 代表研究者、グループリーダー、研究員の人数 赤字は内数としての外国人数 (2及び3も同様)
 2: 技術員の人数 3: 各ユニットにおける人員総数

<添付資料#1-3>

平成20年度 共同研究契約

	ユニット名	相手方
1	共通 (遠藤/柳田/丸山/政井)	琉球大学
2	遠藤	信州大学
3		理化学研究所 伊藤研究室
4	銅谷	(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)
5		ホンダ・リサーチ・インスティテュート・ジャパン
6		本田技術研究所
7	柳田	京都大学大学院
8	丸山	新潟大学医学部
9		琉球大学
10	サマテ	大阪大学大学院生命機能研究科
11	内藤	クオピオ大学 (フィンランド)
12		慶應義塾大学
13	アーバスノット	オタワ大学 (カナダ)
14		オタゴ大学 (ニュージーランド)
15	外村	TDK株式会社
16	トリップ	リオ・デ・ジャネイロ州立大学 (ブラジル)

平成20年度 受委託研究契約

	ユニット名	相手方
1	銅谷	日本電気株式会社
2	ブレナー	特定非営利活動法人システム・バイオロジー研究機構

<添付資料#2>

主任研究者 採用手順のガイドライン

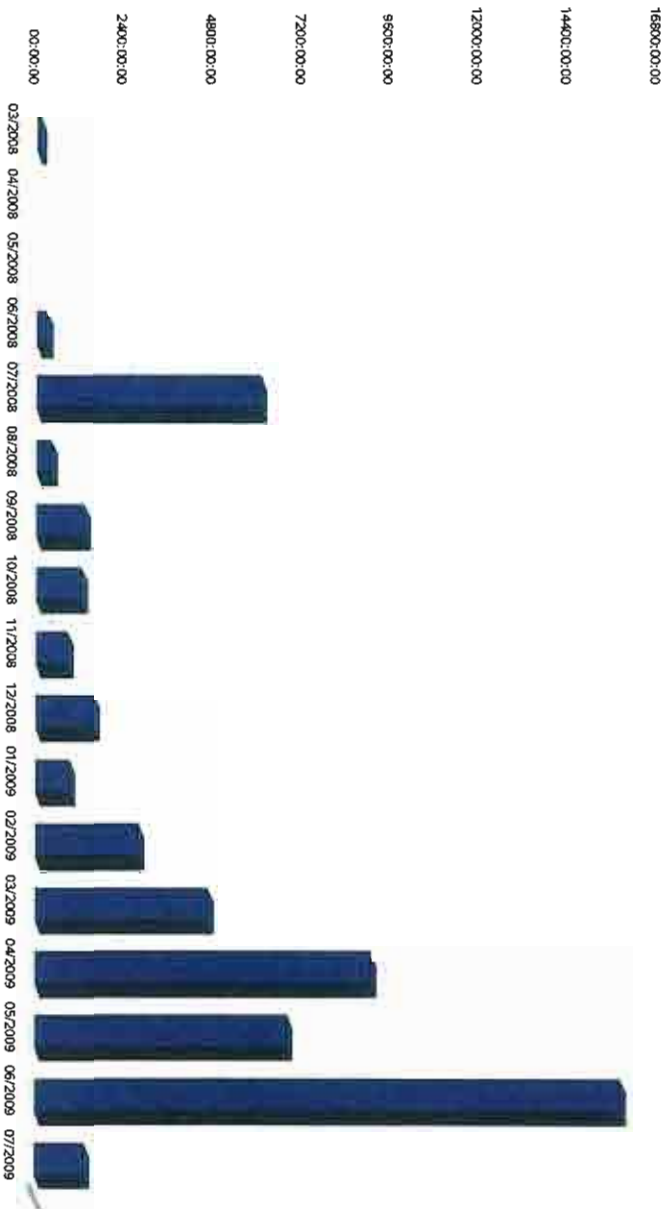
手順	概要
1 募集	職務内容の記述を準備 (*) 公式な募集通知
2 応募者の選考	推薦人への照会 (*) 応募者を電話面接により選考
3 応募者の面接	応募者を機構へ招聘 面接の実施 (*) 研究計画書のプレゼンテーション
4 応募者の評価	研究計画書の質及び独創性の評価 (*) 応募者のプレゼンテーション及びコミュニケーションスキルの評価 主任研究者候補者として理事長に推薦 (*) 運営委員会の承認後に理事長により内定
5 内定通知	選出された応募者に通達 内定通知の発行

(*) 選考委員会が担当

審査委員会の構成員としては、理事長、理事、採用を予定している PI ポジションの研究分野に近い分野に携わる PI、及び外部の著名な研究者が考えられる。

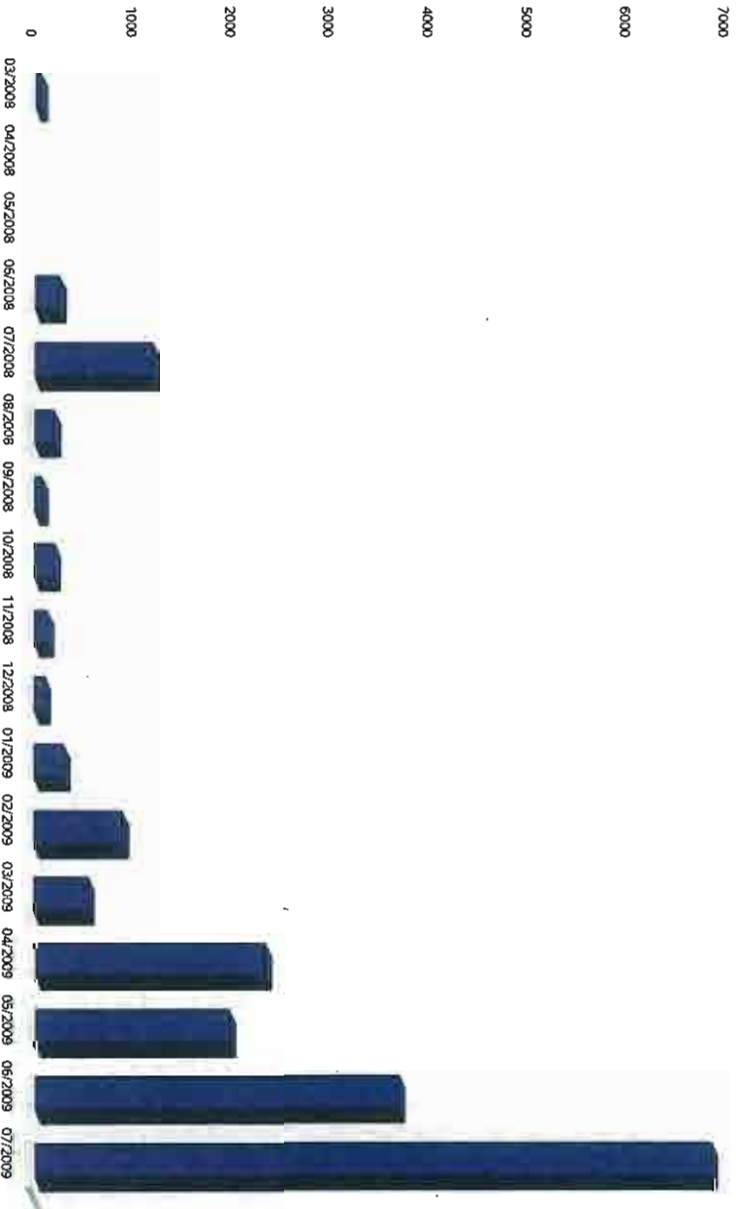
月別コンピューター使用時間

Computational hours per month (through 12 July)



<添付資料#3-2>

月別コンピューター使用回数 Jobs per month





G8 科学技術大臣会合 「環境とエネルギー問題」 ワークショップ in 沖縄

3人のノーベル賞受賞者による参加決定!

北海道洞爺湖サミットに先立ち、地球規模の課題の解決に向けた科学技術協力の強化などについて話し合うため、主要国(G8)史上初めてとなる科学技術大臣会合が6月15日に沖縄で開催されます。会合のプレイベントとして開催される本ワークショップでは、「環境とエネルギー問題」をテーマに、ノーベル賞受賞者を含むゲストスピーカーによる講演などを通して、いまなぜ科学技術が必要なのか、地域間・国際協力の可能性について考えます。

参加者



有馬 朗人 博士
(日本科学技術振興財団会長・元文部科学大臣
沖縄科学技術研究基盤整備機構運営委員会共同議長)
「安全な原子力を使わざるを得ない。
そして税金を払ってでも新エネルギーを」



スティーブン・チュー 博士
(ローレンスバークレー国立研究所長・1997年ノーベル物理学賞受賞
沖縄科学技術研究基盤整備機構運営委員会委員)
「エネルギー問題と解決のために私たちができること」



北野 宏明 博士
(ソニーコンピュータサイエンス研究所取締役副所長
沖縄科学技術研究基盤整備機構スペシャルアドバイザー)
「気象変動とエネルギー問題に対する生物学的アプローチ」



李 遠哲 博士
(台湾中央研究院名誉会長・1986年ノーベル化学賞受賞
沖縄科学技術研究基盤整備機構運営委員会委員)
「アジア太平洋諸国の自覚と協力」

開催者



シドニー・ブレナー 博士
(沖縄科学技術研究基盤整備機構理事長
2002年ノーベル生理学・医学賞受賞)

プログラム

- 9:00~ 9:10.....開催者挨拶
- 9:10~14:00.....各参加者による講演
(12:00~13:00...昼休憩)
- 14:00~15:00.....パネルディスカッション

■ 開催日時: **平成20年6月14日(土)**
9:00~15:00

■ 開催場所: 琉球大学法文学部 新棟 215教室

■ 受講対象者: 高校生(100名)・大学生(100名)・一般(50名)

■ 参加料: **無料**

■ 通訳: 日英同時通訳あり

■ 申込期間: 平成20年5月19日(月)~5月30日(金)
※但し、定員に達し次第締め切ります。

問い合わせ及び申込み先

琉球大学 学術国際部 研究協力課 地域連携推進室
電話:098-895-8019,8031 FAX:098-895-8185
月~金 8:30~17:15(土・日・祝祭日及び12:15~13:00は除く)



G8科学技術大臣会合
「環境とエネルギー問題」ワークショップ in 沖縄

要旨

主要国（G8）史上初めてとなる科学技術大臣会合が6月15日に沖縄で開催されるのに先立ち、会合のプレイベントのひとつとして「環境とエネルギー問題」をテーマとしたワークショップが6月14日に琉球大学で開催されました。ワークショップでは、4人のゲストスピーカーによる講演がおこなわれたほか、沖縄科学技術研究基盤整備機構の理事長、シドニー・ブレナー博士も参加して質疑応答がおこなわれました。以下は、講演と質疑応答の要旨です。なお、本ワークショップは沖縄科学技術研究基盤整備機構、琉球大学、台湾中央研究院、米国ローレンスパークレー国立研究所が主催、後援は沖縄県です。

有馬朗人博士

財団法人日本科学技術振興財団会長、元文部科学大臣
独立行政法人沖縄科学技術研究基盤整備機構運営委員会共同議長
講演タイトル：「安全な原子力を使わざるを得ない。

そして税金を払ってでも新エネルギーを」

新たな代替エネルギーは、より効率的で環境負荷が少ないものでなければなりません。統合された石炭ガス化サイクルと二酸化炭素回収・蓄積技術は重要となってくるでしょう。太陽光発電と風力発電も代替エネルギーとして活用できますが、年間を通じて一定した電力供給が困難であり、安価で効率的な蓄電池の開発が必須となります。新たなクリーンエネルギーも期待されますが、その貢献度は限られたものにならざるを得ません。

代替エネルギーがより安価に、そして安定的に利用できるようになると予想される少なくとも2050年までは、現在のこの危機的状況を回避するためにも原子力発電の利用と核融合の研究開発が必須です。国際原子力機関の調査は原子力発電に関する国民の受容度が向上してきていることを示唆していますが、核燃料の供給と安全性の確保、さらには、核廃棄物の適切な管理が鍵となります。先進国においては、3R運動（Reduce = 節約、Reuse = 資源を何回も使う、Recycle = 資源の再利用）を徹底することが必須で、税金を使ってでも新エネルギー技術の開発に取り組むべきです。

スティーブン・チュー博士
ローレンスパークレー国立研究所長

1997年ノーベル物理学賞受賞

沖縄科学技術研究基盤整備機構運営委員会委員

講演タイトル：「エネルギー問題とその解決のために私たちができること」

世界の最も深刻な懸念のひとつが国家の安全保障です。これはエネルギー問題や経済の繁栄、社会的変化、そして潜在的に危機が差迫っているといわれる気象変動にも直結しています。これらの問題の鍵をにぎるのが、持続可能なエネルギーの生産と消費です。エネルギー効率の向上と資源の保全を一層促進し、新しい技術革新を促進する国家の政策が求められています。また、現在のエネルギーの需要と供給の在り方を一新するような科学的発見も求められています。これには、カーボンニュートラル（炭素中立）なエネルギーの開発や、今より5～10倍エネルギー消費を抑えられるビルの建設、排出された二酸化炭素を地中に埋める技術、ウィンドタービンの利用、より優れた電池の開発、そして食品原料と競合する農作物に代わる、ススキなどの植物によるバイオ燃料の開発などが含まれます。

また、既存の技術を利用し、エネルギーの需供バランスを一変する科学的発見にも期待が寄せられます。それには例えば、酵母を用いてガソリンとよく似た燃料をつくる合成生物学の技術や、光合成再現のため人工膜組織を作製する研究が挙げられます。

北野宏明博士

株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所副所長

沖縄科学技術研究基盤整備機構スペシャルアドバイザー

講演タイトル：「気象変動とエネルギー問題に対する生物学的アプローチ」

エネルギーと気象変動は今日人類が直面する最も重要な問題で、これらの問題を解決するためには複数の取り組みが必要です。手品のような解決策はなく、生物学的なアプローチが大変重要となってきます。それには食品原料と競合しない方法で作られるバイオ燃料の開発と利用や、生物多様性の維持が含まれます。

一つの鍵でありながら見過ごされがちなのは、さんご礁やその他の水生生物を含む海洋領域で、これらの研究は科学の裾野を広げることを意味します。また気候変動にともない、新たな健康上の問題が増大することも懸念されており、これらの解決のためには従来にはない、よりオープンなアプローチが必要となります。

沖縄科学技術研究基盤整備機構（OIST）においては、カーボンニュートラル（炭素中立）のキャンパス設立をめざし、代替エネルギーに関する最先端の研究をおしすすめるほか、さんご礁の保護や再生、システム生物学の研究を通して、沖縄がカーボンニュートラルな島になるよう働きかけることで、この試みの一翼を担うことができます。

李 遠哲博士

台湾中央研究院名誉会長

1986年ノーベル化学賞受賞

沖縄科学技術研究基盤整備機構運営委員会委員

講演タイトル：「アジア太平洋諸国の自覚と協力」

私たちは過去数十年にわたり人類のグローバリゼーション化を見てきましたが、達成にいたるにはまだ道半ばです。国家間の競争は烈しくなるばかりで、「ひとつのグローバルコミュニティ」を実現するにはほど遠く、このことが原因で私たちは様々なことに悩まされています。

- フロンガスによるオゾン層の破壊をはじめとする環境問題や、温室効果ガスが原因の地球温暖化の傾向は、地球規模で取り組まなければなりません。沖縄はアジア太平洋地域の真ん中に位置します。離れた島でありながら、クリーンエネルギーを獲得することができることを世界に示すには素晴らしい場所です。また、沖縄科学技術研究基盤整備機構（OIST）の目的のひとつが、アジア太平洋地域におけるエネルギーと環境問題について研究する国際拠点となることも有り得るのです。

21世紀に人類が直面する問題を科学技術によって解決するためには、今よりも速いペースで科学技術を進展させるだけでは不十分です。現在私たちが暮らすこの「有限」で「半グローバル化した」世界において、科学技術の果たせる役割について特別な関心をはらい、国境を越えて協力することを学び、「自国の国際競争力」について懸念し続けるのではなく、「問題解決のための国際競争」について注意喚起を促していけるようであれば、問題は解決しないのです。

パネルディスカッション

講義の後は、会場に集まった聴衆から質問をうけるかたちでパネルディスカッションがおこなわれました。最も現実的に、そしてすぐにも実現できる国の環境政策は何であるかという質問に対して、チュー博士からは排出した二酸化

炭素の量に比例して費用を支払うシステムを確立することが挙げられました。同博士の講義では、1974年以來カリフォルニア州の住民一人あたりのエネルギー消費が安定していることが紹介されましたが、ブレナー博士はこうした省エネ対策の重要性を強調し、消費者の意識を高めることの大切さを訴えました。またブレナー博士からは、電力消費量に応じて電力単価が累進的に上昇するような価格体系を導入することが提唱されました。

北野博士の講義では、ボルネオにおいてバイオ燃料生産用の油椰子栽培のために森林が伐採されていることが取り上げられましたが、会場からはこのようなことの見込み可能性と防止策についての質問がありました。北野博士はこの問題の背景として、その地域の経済的困窮と政府の規制の有無と実効性に対する疑問点を挙げ、自然保護と経済的発展が両立するような技術移転と支援が、これらの問題の解決を必要とする国々に対して行われることの重要性を訴えました。

有馬博士に対しては、原子力発電に伴う危険性と国民感情に関しての質問が向けられましたが、同博士からは原子力技術の初めての利用法が原子力爆弾の製造ではなく、発電のためであったならば、国民の受けとめ方はもっと違っていたであろうと指摘しました。そして、日本では地震の時に原子炉が自動停止するなど、最近では原子力発電の安全性もきちんと確保されることが証明されるようになり、国民も徐々に好意的に受けとめているようだと言及がありました。

最後にパネリストたちは、地球温暖化とエネルギー問題に関して、全世界規模の協調と、それを解決する科学技術を進展させることの必要性について意見を述べました。

< 添付資料#5-1 >

OIST 冬期コース “ 「生物複雑系の進化」 ” プログラム

School (December 8–12)

Monday, December 8

- 09:30–10:00 Welcome note (Sydney Brenner) General introduction
10:00–11:30 Lecture 1 (Nori Satoh) "An overview of the evolution of complex systems of animals"
11:30–11:45 Break
11:45–12:20 Discussion (Nori Satoh)
12:20–14:00 Lunch
14:00–15:30 Lecture 2 (David Miller) "Animal genome evolution and the origins of axial patterning mechanisms: insights from diploblastic animals"
15:30–16:00 Break
16:00–17:00 Discussion (David Miller)
18:30–20:00 Mixer (dinner)

Tuesday, December 9

- 09:30–11:00 Lecture 3 (William McGinnis) "Hox genes: regulators of animal body patterning during development and evolution"
11:00–11:20 Break
11:20–12:20 Discussion (William McGinnis)
12:20–14:00 Lunch
14:00–17:00 Lab work (Takeshi Kawashima) "Molecular phylogenetic analysis"

Wednesday, December 10

- 09:30–11:00 Lecture 4 (Michael Levine) "Transcriptional precision in the *Drosophila* embryo"
11:00–11:20 Break
11:20–12:20 Discussion (Michael Levine)
12:20–13:30 Lunch
13:30–19:00 Excursion: Sesoko Station (Tropical Biosphere Research Center, University of the Ryukyus) and Okinawa Churaumi Aquarium

Thursday, December 11

- 09:30–11:00 Lecture 5 (Nori Satoh) "The origin and evolution of chordates"
11:00–11:20 Break
11:20–12:20 Discussion (Nori Satoh)
12:20–14:00 Lunch
14:00–15:30 Lecture 6 (Richard Harland) "Signaling pathways in *Xenopus* development"
15:30–16:00 Break
16:00–17:00 Discussion (Richard Harland)

Friday, December 12

- 09:30–10:30 Lecture 7 (Sydney Brenner) "Evolution of complex systems"
10:30–11:00 Break
11:00–12:30 Discussion (Sydney Brenner)
12:30–13:30 Lunch

Workshop (December 12–13)

Friday, December 12

- 13:30–13:45 Opening address (Nori Satoh)
13:45–14:20 Sven Leininger: "Development and regeneration of the marine calcareous sponge, *Sycon ciliatum*"
14:20–14:55 Shinichi Sunagawa: "A novel, lineage-specific cysteine-rich peptide family expanded in reef-building corals"
14:55–15:30 Clement Lamy: "Whole genome analysis of the planaria *Schmidtea mediterranea* reveals new families of 7-transmembrane receptors"
15:30–15:50 Break
15:50–16:25 Martina Hroudá: "Molecular analysis of the evolution of body axes in basal bilaterians: conserved signalling pathways in the acoel *Isodiametra pulchra* and the rhabditophoran flatworm *Macrostomum lignano*"
16:25–17:00 Masa-aki Yoshida: "Function of vascular endothelial growth factor in vascular development of the cephalopod"

Saturday, December 13

- 09:00–09:35 Shigehiro Yamada: "Interaction of notochord-derived fibrinogen-like protein with Notch regulates the dorsal positioning of the central nervous system of *Ciona intestinalis* embryos"
09:35–10:10 Fuki Gyoja: "Analysis of large scale expression sequenced tags (ESTs) from the anural ascidian, *Molgula tectiformis*"
10:10–10:30 Break
10:30–11:05 Rie Kusakabe: "Evolution of vertebrate myogenesis: insights from the musclerelated genes during lamprey development"
11:05–11:40 Kinya G. Ota: "Hagfish embryology and its significance for the vertebrate Evo-Devo study"
11:40–12:15 Koh Onimaru: "Insights into the sequential evolutionary events toward the acquisition of paired fins, in relation to evolution of T-box genes and *Engrailed*"
12:15–14:00 Lunch
14:00–14:35 Sukumar Chandra Noskor: "Ultrastructural studies of hepatic architecture in teleost livers associated with phylogeny"
14:35–15:10 Colin Crist: "Prediction and experimental validation of microRNAs that target the myogenic regulatory factors Pax3 and Myf5"
15:10–15:30 Break
15:30–16:05 Eiji Matsunaga: "Evolution and diversity in avian vocal system"
16:05–16:40 Tsuyoshi Yoda: "Shape transitions of cell-sized liposomes: osmotic stress and oxidative stress"
18:30–20:30 Farewell reception

Sunday, December 14

Departure

<添付資料#5-2>

「生物複雑系の進化」コース2008 参加者数

2008年12月8日～14日

	講師	チューター	コース参加者 (全日程)	ワークショップ 参加者 (12-14日)	聴講者	合計
アメリカ	3	1	1		1	6
イギリス	1		1			2
ヴェネズエラ			1			1
オーストラリア	1					1
オーストリア			1			1
カナダ			1			1
ドイツ			3			3
バングラデシュ			1			1
フランス				1		1
日本	1	7	6	5	5	24
合計	6	8	15	6	6	41

(うち外国人数) 5 1 9 1 1 17

<添付資料#6>

2008年 論文出版リスト

1. Achard, P. and E. De Schutter, *Calcium, synaptic plasticity and intrinsic homeostasis in purkinje neuron models*. Front Comput Neurosci, 2008. 2: p. 8.
2. Adachi, Y., et al., *Cut1/sepase-dependent roles of multiple phosphorylation of fission yeast Cohesion subunit Rad21 in post-replicative damage repair and mitosis*. Cell Cycle, 2008. 7(6): p. 765-776.
3. Akiyama, K., et al., *Actin-related protein 3 (Arp3) is mutated in proteinuric BUF/Mna rats*. Mammalian Genome, 2008. 19(1): p. 41-50.
4. Aoyama, M., et al., *A novel biological role of tachykinins as an up-regulator of oocyte growth: Identification of an evolutionary origin of tachykininergic functions in the ovary of the ascidian, Ciona intestinalis*. Endocrinology, 2008. 149(9): p. 4346-4356.
5. Bissmarck, F., et al., *Combining Modalities with Different Latencies for Optimal Motor Control*. Journal of Cognitive Neuroscience, 2008. 20(11): p. 1966-1979.
6. Bonnard, B., et al., *Conjugate and cut loci of a two-sphere of revolution with application to optimal control*. Annales de l'Institut Henri Poincare (C) Non Linear Analysis, 2008. doi:10.1016/j.anihpc.2008.03.010
7. Chen, E., et al., *Model of traveling waves in a coral nerve network*. Journal of Comparative Physiology a-Neuroethology Sensory Neural and Behavioral Physiology, 2008. 194(2): p. 195-200.
8. Christiaan, L., et al., *The transcription/migration interface in heart precursors of Ciona intestinalis*. Science, 2008. 320(5881): p. 1349-1352.
9. De Schutter, E., *Reviewing multi-disciplinary papers: a challenge in neuroscience?* Neuroinformatics, 2008. 6(4): p. 253-5.
10. De Schutter, E., *Why are computational neuroscience and systems biology so separate?* Plos Computational Biology, 2008. 4(5): p. 6.
11. Doya, K., *What is the objective function of the brain*. Instrumentation and Control, 2008. 47(1): p. 69-73.
12. Doya, K., *Computers in the brain: Network and molecular mechanisms in cerebellum, basal ganglia, hippocampus, and cerebral cortex*. Seitai-no Kagaku, 2008. 59: p. 10-19.
13. Doya, K., *Modulators of decision making*. Nature Neuroscience, 2008. 11(4): p. 410-416.
14. Elfving, S., et al., *Co-evolution of Shaping Rewards and Meta-Parameters in Reinforcement Learning*. Adaptive Behavior, 2008. 16(6): p. 400-412.
15. Englitz, B., K.M. Stiefel, and T.J. Sejnowski, *Irregular firing of isolated cortical interneurons in vitro driven by intrinsic stochastic mechanisms*. Neural Computation, 2008. 20(1): p. 44-64.
16. Fukunaga, K.I. and A. Sugawara, *Anisotropic cross-tie walls and their confinement in self-organized undulating Fe film*. Journal of Applied Physics, 2008. 103(5): p. 6.
17. Gu, P., et al., *Novel MicroRNA Candidates and miRNA-mRNA Pairs in Embryonic Stem (ES) Cells*. PLoS ONE, 2008. 3: p. e2548.
18. Harada, Y., et al., *Mechanism of self-sterility in a hermaphroditic chordate*. Science, 2008. 320(5875): p. 548-550.
19. Hayasaka, T., et al., *Matrix-assisted laser desorption/ionization quadrupole ion trap time-of-flight (MALDI-QIT-TOF)-based imaging mass spectrometry reveals a layered distribution of phospholipid molecular species in the mouse retina*. Rapid Communications in Mass Spectrometry, 2008. 22(21): p. 3415-3426.
20. Holland, L.Z., et al., *The amphioxus genome illuminates vertebrate origins and cephalochordate biology*. Genome Research, 2008. 18(7): p. 1100-1111.
21. Hong, S.H. and E. De Schutter, *Purkinje Neurons: What is the Signal for Complex Spikes?* Current Biology, 2008. 18(20): p. R969-R971.
22. Imamura, O., et al., *Analysis of Extracellular Signal-Regulated Kinase 2 Function in Neural Stem/Progenitor Cells via Nervous System-Specific Gene Disruption*. Stem Cells, 2008. 26(12): p. 3247-3256.
23. Ito, M. and K. Doya, *[Mathematical models of decision making and learning]*. Brain Nerve, 2008. 60(7): p. 791-8.
24. Jeffery, W.R., et al., *Trunk lateral cells are neural crest-like cells in the ascidian Ciona intestinalis: Insights into the ancestry and evolution of the neural crest*. Developmental Biology, 2008. 324(1): p. 152-160.
25. Kawashima T, et al., *New outlooks on evolutionary studies brought from ten years of animal genome decipherment (動物ゲノム解読の10年をもたらした新しい進化観)*. Kagaku, 2008. 78: p. 1070-1079.
26. Kim, J.J., et al., *Magnetic domain observation in writer pole tip for perpendicular recording head by electron holography*. Applied Physics Letters, 2008. 92(16): p. 3.
27. Koike-Tani, M., et al., *Involvement of AMPA receptor desensitization in short-term synaptic depression at the calyx of Held in developing rats*. Journal of Physiology-London, 2008. 586(9): p. 2263-2275.
28. Kojima, N., et al., *Inducible cAMP early repressor acts as a negative regulator for kindling epileptogenesis and long-term fear memory*. Journal of Neuroscience, 2008. 28(25): p. 6459-6472.